

**第32回（2000年度）サントリー音楽賞は
飯守泰次郎氏に決定**

財団法人 サントリー音楽財団は、わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた個人または団体に贈る「サントリー音楽賞」の第32回（2000年度）受賞者を飯守泰次郎氏に決定しました。

●選考経過

1. 2001年1月14日（日）午前10時から東京・丸の内の東京會館において、選考委員10名により第一次選考を行い、「候補者」を選定した。
2. 引き続き3月9日（金）午前10時から、東京・千代田区紀尾井町のホテル・ニューオータニにおいて選考委員10名により最終選考会を開催、慎重な審議の結果、第32回（2000年度）サントリー音楽賞受賞者に飯守泰次郎氏が選定され、同日午後開催の理事会において正式に決定された。

※選考理由は別紙の通り。

●賞金は700万円。

●選考委員は下記の10氏。

礒山 雅・岩井宏之・小石忠男・白石美雪・武田明倫
丹羽正明・根岸一美・藤田由之・船山 隆・三宅幸夫

（敬称略・50音順）

<贈賞理由>

近年、飯守泰次郎氏は指揮者としての活動の場を日本に移してきたが、2000年は東京シティ・フィルの常任指揮者として、ベーレンライター校訂新版による国内初の「ベートーヴェン・チクルス」（3月16日、5月18日、7月27日、11月2日、および12月26日）に取り組み、古典的作品の演奏を通じて、この若いオーケストラの実力を飛躍的に高めた。そして同楽団創立25周年記念公演（9月2日）では、ワーグナー「ラインの黄金」をセミ・ステージ形式で上演し、長年バイロイト音楽祭で音楽助手を務めた経験を活かして公演を成功に導き、オーケストラが主導する舞台上演というワーグナー上演の新しい可能性を切り拓いたことは称賛に値する。

また新国立劇場におけるバルトーク「青ひげ公の城」（11月24、26、28、29日）

の指揮もさることながら、2000年度の飯守氏の業績で特筆に価するのは、なんとといっても関西二期会公演、ワーグナー「パルジファル」（10月7、8日）における指揮であろう。この公演は日本におけるワーグナー上演史に金字塔を打ち立てたものであるが、飯守氏がワーグナー晩年の難解な作品に対して洞察に満ちた解釈をおこない、またそれをワーグナー経験の浅い独唱者・合唱団・オーケストラに徹底して伝えることができたのは、とりもなおさず飯守氏が非凡な文学的・音楽的能力と、すべての音楽家から信頼される包容力ある人格を兼ね備えている証しといえよう。

飯守氏は人気を追い求めることなく — 教育的な意味でも — 堅実に指揮活動を積み重ね、わが国の音楽文化を裾野から支える貴重な人材となっている。上記の理由から、ここに今年度のサントリー音楽賞を贈り、飯守氏の長年にわたる功績を称える事は、まことに時宜にかなったものと判断したい。

<略 歴>

1940年旧満州生まれ。62年桐朋学園短大指揮科卒業と同時に藤原歌劇団公演「修道女アンジェリカ」にてデビュー。63年に読売日本交響楽団の副指揮者に就任、70年までつとめる。66年ミトロプーロス国際指揮者コンクール（ニューヨーク）で4位に入賞。67～70年にブレーメン歌劇場指揮者兼コーチをつとめ、69年にはカラヤン国際指揮者コンクール（ベルリン）で4位入賞を果たした。その後72～76年に読売日本交響楽団の指揮者として活躍。

海外での活躍もめざましく、70年から現在に至るまでバイロイト音楽祭の音楽助手をつとめ、また指揮者兼コーチとしてドイツのマンハイム歌劇場（70～73年）、ハンブルク歌劇場（73～75年）、レーゲンスブルク歌劇場（77～78年）に籍を置く。これら内外の活躍に対して82年に芸術選奨新人賞（東京）と、シーズン最高指揮者賞（バルセロナ）を受賞している。78年から83年までオランダ・エンスヘーデ歌劇団の第一指揮者を、79年には同音楽院オーケストラの指揮者（現在は顧問）となり現在に至っている。

83年に帰国し、全国主要オーケストラの定期公演などに出演する他、日生劇場開場20周年記念モーツァルト・シリーズで「魔笛」「コシ・ファン・トゥッテ」を指揮した。1993年4月から98年3月まで、名古屋フィルハーモニー交響楽団の常任指揮者を務め、1997年9月からは東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の常任指揮者に就任。就任3年目の2000年には、ベーレンライター校訂新版によるベートーヴェン・チクルス、ワーグナー「ラインの黄金」を指揮するほか、大阪でワーグナー「パルシファル」、新国立劇場でフリードリヒ・ゲッツ演出の「青ひげ公の城」等を指揮して絶賛されている。

2001年1月からは関西フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者を兼任。

以 上